

## Episode1

目が覚めたら部屋が明るくなっていて、枕元にスマホが置いてあった。昨夜も動画を観たまま寝落ちしたらしい。壁にかかった時計を見ると七時半になろうとしている。

目覚めは良い方だった。昨日はつい夜更かしをしてしまったのに、ちやんとこの時間に目が覚める。今まで寝坊は一度もない。それが自慢と言えるかどうかは分からない。なぜなら人と比べたことはないからだ。

みのる

ベッドを降りて、自分の部屋を出ると、父、実はもう起きていて、テーブルの上に朝食が出来ていた。「おはよう」も言わない。それがこの親子関係だった。実はすでに食事を済ませてソファに座り、朝の情報番組

を觀ていた。男同士だとほとんど會話もない。これがこの家の朝の光景なのだ。

シュンは茶碗にご飯を盛って、冷めた目玉焼きを温めることもせずに箸をつけた。子供の頃からの猫舌なので、冷めていても氣にならなかった。

「お前、就職は決めたのか？」

親子でコミュニケーションをとろうと思っているのか、実が声をかけてきた。そんなことが時々煩わしくも思うが、無視するのも悪いと思った。

「まだ」

一言だけ、答えてやった。

「そうか。まあいいさ。自分の道は自分で決めろよ。慌てることはない。好きでもないことをやっても長続きしない。父さんがそうだった」

いつも同じことを言ってくる。「好きじゃないことをやっても長続きしない」「このセリフを何十回、何百回聞いたか知れない。今度は無視した。

シュン

綾瀬春は高校三年生の十七歳だった。来月には誕生日を迎える。実は四十五歳で小さな洋食屋を営んでいる。小さくても料理人の腕は一流で、お昼時になると店は込み合い、収入は安定していた。

「母さんとは会ってるのか？」

「LEEはしてる」

「会ってないのか？」

「最近はね」

シュンはこの家で、父親と二人暮らした。母の由美子はやりたかったとがあり、シュンが高校に入学してしばらくした頃、離婚してこの家を

出て行った。離婚した当初、由美子に好きな人ができたと思っていたが、未だに再婚している様子はなく、念願の美容室を開業して、忙しそうにしていた。父と母は同じ四十五歳だ。

由美子が出て行ったことで、不便なことはあったが、特に寂しい思ったことはなかった。会いたければいつでも会える、逆に一緒に住んでいると、口うるさいことを言われる。別居だとそれがなくていいとさえ思っていたのだ。

離婚してからは、一か月に一度のペースで会っていたが、その間隔も遠のき、今では用事がある時に連絡して会う程度だ。由美子も忙しいし、自分もわざわざ時間を作って会うことが面倒になってきた。